



1 自己評価

I 評価結果

○ (別紙) 令和6年度県立玉野高等学校評価書

◆ 参考資料

- ・ 令和6年度学校自己評価のためのアンケート結果及び分析

II 分析・改善方策

<全体分析>

学校自己評価アンケートにおける「玉野高校に進学してよかったと思っている」(生徒)の数値が90%、「子どもを玉野高校に進学させて良かったと思っている」(保護者)の数値が84%であった。生徒の数値は例年並みであるが、生徒の『玉高でよかった』という意識がさらに高まるように、授業での取組や日々の学校活動、部活動、特別活動において、自己肯定感や有用感を得られるような仕掛けを設けなければならない。一方で、保護者の数値は前年までと比べて下がっている。学校の教育方針や教育目標についてまだ保護者に伝え切れていないと言える。HPやブログ、さくら連絡網等を活用して、保護者にもっとわかりやすく日々の情報提供をしていかなければならない。

また、「学校行事は、生徒が主体となって活発に取り組んでおり、充実したものになっている」(生徒)の数値が95%、「学校は、生徒の成長や学びに繋がるように学校行事を工夫している」(保護者)の数値が85%であった。生徒会を中心に、生徒の意見を引き出して新たな提案を行うなど、生徒会執行部の活動も活発化しており、玉野高校の魅力化づくりは着実に進んでいる。部活動においても、運動部のみならず文化部も近年華々しい成果を挙げている。人とのつながりが様々な面で活性化し、良い相乗効果をもたらしている。

今年度の総合的な探究の時間では、1年次生の「Unit 探究」において、高校コーディネーターのサポートを受けながら年次団で試行錯誤して、地域と連携した取組を多数行うことができた。生徒も楽しみながら学習・探究することができた。2年次生も、各地域に出かけての探究活動を積極的に行っており、自ら企業や外部団体にアポイントメントを取り、アンケートやインタビュー等を行い、有益なアドバイスや情報も得ている。これらの活動を通して、確実に人間性や社会性の成長につながっていると思われる。

<各重点における分析>

各重点項目の分析は次のとおりである。

なお、(1)～(3)は、学校評価書別紙の学校経営目標番号を示している。

- (1) ケース会議だけでなく、日頃から職員室で年次団教員間の情報共有ができており、臨機応変に生徒対応することができた。SCやSWの協力で多くの生徒に細やかに対応し、また外部の専門機関や病院、行政に繋ぐことができていた。かたや、2学期以降、生徒間の人間関係によるトラブルが目立った。課、室ともに連携しながら生徒・保護者への対応を行い、年次集会でも集団行動での規律、マナーの再確認を強調した。SNS上のトラブルが関係を悪化させているケースも多く、携帯電話の使用についても再度注意喚起を行っている。
- (2) 毎年課題に挙げられている「家庭学習時間の定着」を目指し、進路指導課を中心に進路意識を持って学習意欲に繋がるよう働きかけたが、未だ改善されていない。また、教員の「チーム玉野」による授業力向上も継続して取り組み、魅力ある授業を展開することで、生徒の学習意欲向上に繋げている。学習の必要性を感じる生徒は多く、学習意欲も高いが、集中力や継続力が不足している。自学自習ができるよう、やり方を指導する必要がある。
- (3) 多くの生徒が進路や将来について考えようとしている。2学期に入り、総合的な探究の時間では校外よりゲストを迎える機会が多くなり、20名を超える外部講師を迎え、生徒との交流を図った。生徒たちが地域の大人との交流を通じて、自身の将来像を見据える良い機会となった。また、学校に対するボランティアの要請は多く、何回もボランティア活動に参加している生徒も多い。次年度はこれまで参加できていない生徒に対して、年次として機会を設定するなどの工夫をしたい。

別添1（様式）

2 学校運営協議会委員名

山根 一人（運営協議会会長）	東 りえ（運営協議会委員）	五老海正登（運営協議会委員）
恵谷 栄一（運営協議会委員）	大川 佳郎（運営協議会委員）	大倉 明（運営協議会委員）
河田いづる（運営協議会委員）	栗林太郎（運営協議会委員）	谷 あゆみ（運営協議会委員）
二宮 崇（運営協議会委員）	琵琶 学（運営協議会委員）	藤原 直之（運営協議会委員）
山本 育子（運営協議会委員）	山本 和音（運営協議会委員）	

3 学校関係者評価

<全般的な評価の概要>

- 学校自己評価について、今年度の取組についての評価は適正と判断された。あわせて今後の学校経営や、地域連携についての提言・意見が出された。

<学校の現状・生徒の実態についての提言・意見>

- 「エリア探究」「エリアティーチャー」について何となく具体的にイメージがつきにくい、委員として協力は行っていきたい。素晴らしい取り組みだと感じるが、生徒がどう感じて取組をとらえていくかが重要だ。
それぞれのUnitに対して将来像や学ぶ目的をしっかりと理解すれば意義ある一年の学びになる。目的をしっかりと持たせることで、自身の武器や自信につながり、高校卒業後の人生に生きてくる。
- 大変ユニークな学習方法で、生徒と触れ合う貴重な機会だった。講師自身が取組の目標をもっと理解し講師の役割モデルを取れるような説明や準備、材料が事前にもう少し欲しかった。わずかな時間であり、生徒たちは何か学びとして受け取っていたのか不安だが、とても楽しかった。
- 先生方の熱意や想いが生徒に伝わり切っていないことへのもどかしさを感じる。自分の力を主体的に発揮する場所が地域である取組が、玉野高校の授業や総探の時間等で反映されている。地域も変わらざるを得ない状況を目前に、玉野高校や市内高校の取組がいかに地域と一緒に密接した形で、生徒と学び合えるかをコーディネートしていくよう、共に頑張っていきたい。
- 玉野高校が持続可能な集団となり、常にいきいきとした人が循環する集団であってほしい。玉野市外からも入学希望の生徒を増やすため、魅力をどこに付けるかをさらに追及しなければならない。今時の生徒はSNSでしっかり情報収集することは得意だが、それをまとめて何かを伝えたり発表したりすることは苦手と感じる。玉野高校が授業に加えて様々な講座をやっていることが、社会に出た時にとても役立つと思うし必要なことでありがたいことだと思う。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

(1)「熱く 温かく いきいきと」の実践

- ① 基本的生活習慣の確立と規範意識の向上
- ② 主体的行動による、自己研鑽
- ③ 教職員の働き方に関する効率化等の改革を実施し、生徒や家族との充実した時間を確保する。

(2)学びの質の向上（認知能力と非認知能力）

- ① ICTの積極的な活用により、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に取り組み、学力向上を図る。
- ② 探究型学びや体験活動、多面的な評価を通して、学習意欲や地域貢献への意欲向上を図る。

(3)キャリア教育の推進と地域等との連携

- ① 3年間を見通したキャリア教育
- ② 「Sim TaMano2030」（総合的な探究の時間）による地域密着型の探究活動の推進
- ③ 組織的な広報活動による開かれた学校づくり